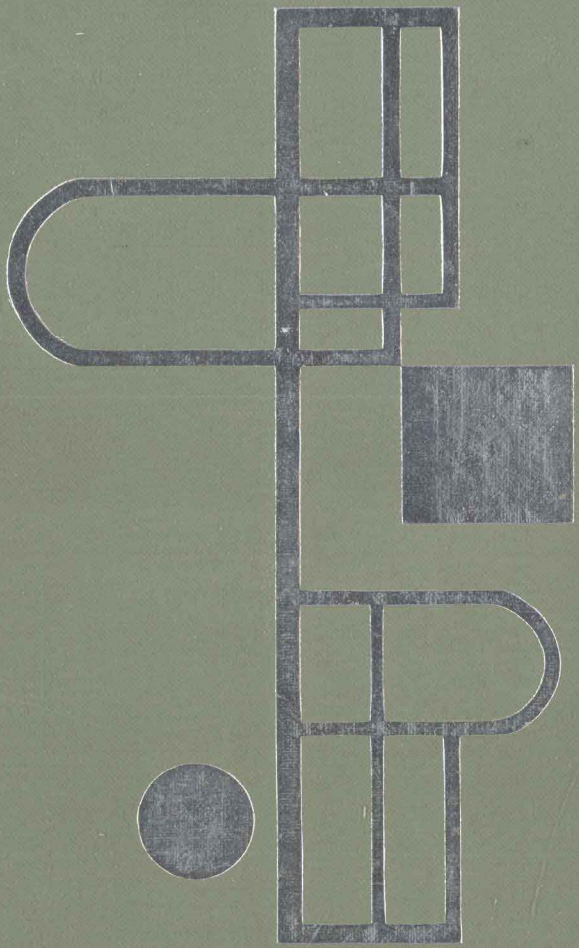
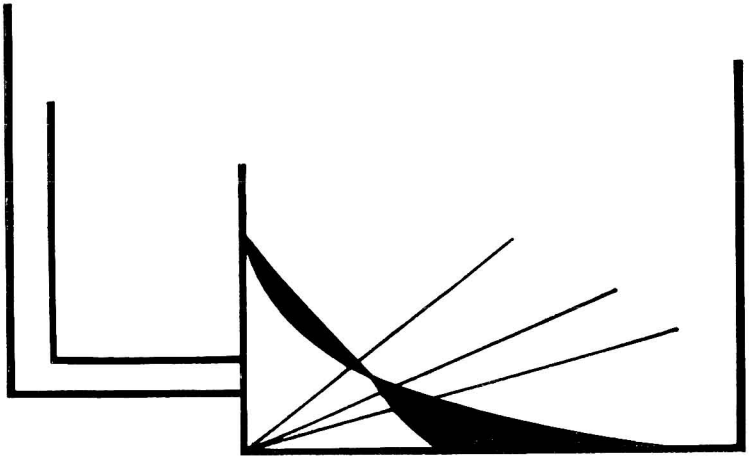


丹羽文雄集

新選 現代日本文學全集
13



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 13

丹羽文雄集

昭和三十四年二月十五日 発行

著者 丹羽文雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行者 古田晁

東京都青梅市根ケ布三八五
印刷者 山田一雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所 筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京一六五七六八

製本 牧製本株式会社
印刷 株式会社精興社
製版 株式会社精興社

丹羽文雄集　目次

幸福への距離……五
蛇と鳩……五九
青麦……二〇九
庖丁……二八一
こおろぎ……二八四
彷徨……二九五
丹羽文雄と合理主義精神……浦松佐美太郎　四三〇
解説……浅見淵　四三五

装幀　恩地孝四郎
恩地邦郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

丹羽文雄集

一

おもての硝子戸が鳴つた。「桑子、桑子」と二度つづけて呼ぶ声がとんで来た。父の癖である。ねぞべつていた一富が、鎌首のように首をもたげた。「いないのか、桑子、桑子」街なかの暑さと、ほこりをはこんできた声であつた。背中が汗でシャツを密着させている、皮をむいた杉色の汗、あれより少し重い色、はだかになりたがつている、暑さで怒りつぽくなつている父親の声であつた。両腕をつつぱつて、一富は父の跫音を聞いていた。跫音にしたがつて、一富の首が徐々に動いた。危険を加えず通りすぎた人間を見送る蛇であつた。

ひらいていた雑誌を両手にもちかえると、一富は自分の世界に戻り、顔に押しあてた。すぐにまた、出来るだけはなして眺めやつた。青色の印刷である。ぎつしりと横に書かれている六号活字、どこに何が書かれているか、彼は諳記していた。カメラのカタログである。レンズの種類とその値段、新古の相違の値段、引伸器があり、閃光器があつた。一か所に、アンダーラインがつけてある。彼の仕業であつた。雑誌は月おくれで表紙が破れていた。ラインのあるカメラは、中でもいちばん安物である。それすら一富には高嶺の花であつた。「夢だ」実現が可能であれば、夢とは言えないだろう。九分九厘、駄目と諦めをつける切なさ、その間際に万が一の僥倖がめぐりくるというので、夢の値打がある。一富は虐められた表情をつづけた。期待で胸が苦しくなる。この一冊に彼の青春がこもつていた。アンダーラインの箇所は、註文書の仕切りのように単なる記述にすぎなかつた。活字は増えもしなければ、減りもしないのである。彼はたつた一行の十五、六字の六号活字に、五百頁の小説本の内容を感じていた。「鈴木のもつてるのは、ローライコードだから持ちはこびに不便だな。安藤は時々お父さんのコンタックスを持つてくるが、あんまり精巧すぎて、ぼくらの手におえないんだ」と、彼は考える。級の三分の一がカメラを持つていた。「ラッキーの引伸器をもつているのは、それでも二、三人だな」彼は何か気がすんだように感じる。学校の写真部に、彼は入会がしたくてたまらなかつた。雑誌を鼻に押しつけると、彼は元気よく寝返つた。畳があたたかい。べつとりと背中をつけている。苦にならない。顔の上でカメラ雑誌が山の形になる。肩からつるしたカメラを支えて、一富は走つていた。あとにつづく友達も、カメラを肩にかけている。走つてくる友達を、カメラにおさめようと、一富は構えて中腰になつた。わあつと叫んで手をふり、友達は撮らすまいと邪魔をする。もつとも自然なポーズ、一〇〇分の一秒、八月上旬午後二時頃、コニカ・ヘキサーF三・五・さくらフィルム・絞F5・6（選外佳作）一富は月例第二部入選作品評を言いあてた気だ。得意である。渓流が白く光つていた。彼は走つていく。両手にカメラをもつて、獲物に向つて駈けていく。それにまた自分がカメラを向けている。被写体も自分。学生控室には夏休みの写真部の旅行の募集が出ていた。二夕晩泊りで、上高地へいくのである。彼はそのことを母親に言いはしなかつた。彼は腹這いに返つた。しつかりとアンダーラインの箇所を見る。数字は一字も変つていない。少しがつかりする。三か月間、この一冊ととりくんで少しも倦きない自分に驚いた。「ぼくは少し偏質狂かしら」昔はこれほど一つのことに拘泥らなかつた。欲しいものが容易に手にはいつた。慾望が小さかつたせいではなかろう。いずれ手にはいるという現実が、慾望をいい加減な、ふやふやしたものにしていた。彼は突然泪ぐんだ。すると、カメラの欲しい思いが胸いつぱいにふくれ上つた。自分が可哀そうになつた。彼は内気な少年のように、慾望を口に出すことが出来ないので、せめてそれが印刷されている頁に肉体を触れさせて、満足したいのだ。頁に頬をつける。片頬は雑誌の一枚を意識した。べつとりと押しあてていた。「活字が、頬にうつるかも知れない」そんなことを思つた。

「なんて行儀が悪いんだ。本をよむ時には、起きて読みなさいと、あんなに言つてあるではないか」

一富はきちんと坐つて父を見た。ほこりと汗の顔、開襟シャツは肌にくつついていた。疲れたベルト、白いズボンが汚れている。帰宅してからいまだに着がえをしていない父に、一富は驚いた。父も己の恰好をふりかえる気になつたらしい。父は不快を感じる。神経がぴりぴりとする。汗にまみれて口が歪んでしまう。この一秒もがまんの出来ないじめじめと生あたたかい汗にひたつた不快の中にいることが、父には何か痛快であつた。父は不恰好な顔をした。

「何の雑誌だ」

一富はうしろにかくすようにした。

「カメラ雑誌だろう。どこから持つて来た」

「友達に借りたのです」

「はじめから表紙がとれていたのか」

自分の顔が灰色になつていくと、一富は感じた。

「そんなものを見ている柄か。何になる。お父さんは、街をとび歩いているのだ」

そら来たと、一富は、だから灰色を前もつて用意してかかつたのだ。間に合わなかつた。大人の言葉は強引に、つなみのように襲う。

「たださえおまえの顔を見ていると、うずうずするんだ。よく今日まで怺えていたものだ」

父は口を尖らせて、言葉を切つた。色が白くて、肥つていて、赤ん坊の肌を思わせる父だが、陽焼けして、下品になり、頭の生地まで焼けていた。首筋のふかい皺。鈍重で、いつこくな性を感じさせる。

「おまえは、誰だ」

一富は、眸を大きくした。

「名のれ」

気が狂つたかと、

「ぼく、田染……」と、口ごもつた。

「田染、なんだ」

「田染一富です」

笑い出す僅かの隙も与えなかつた。父と自分の間に、大きな空虚が出来上つた。降つてわいたようである。一富は怯えた。

「誰の子供だ」

「田染直三の長男です」

「嘘つけ」

平手打ちの一撃だつた。高い音だけが、先ず感覚に来た。それから何が言われたのか、と振返つた鼻先へ、

「おまえは、わしの子供ではない」

父がとたんに無慈悲な物体に見えた。一富はからだを竦めた。息が阻まれた。「とにかく信じなければならない」驚愕が彼の胸の中で鳴り渡つた。父を見つめて、黙つていた。冗談をいつているのでないことは、その顔つきで判つた。父は威張つていた。どこか卑怯であつた。救いを求めるように、一富が膝をゆるめた。近寄る気配にみえた。

「動くな」

一富は卑屈に笑つた。冗談だ、と彼の全身が叫んだ。「面くらわさせようたつて、判つてるんだ。お父さんは、仕事がうまくいかなかつた。だから帰つて来て、何かで爆発させる必要があつたのだ」一富はまだ声変りもしていなかつた。一つの時期はすぎているが、新しい時期が始つたという年代ではなかつた。五十人一ト組の中で、四十人が声変りしているが、一富は残りの少年の中にあつた。「一富君は、青春年齢が二年おくれていますね」と、受持の先生が母に言つた。

「わしに触るな」

この太つた首に、肩に、一富はよくおぶさつたものである。父が朝刊をひらいていた。背後からものも言わずにとびかかるのだ。父がからだをゆすぶつて、いやいやをする。ふりはなされまいとして一富は父の首をしつかりと抱きしめた。お山の大ゆれ。滑る山。父は尻をもちあげ、頭を段々と下げていく。畳に届きそうになる。すると、一富は自分の体重の支えを失つてしまう。肥つた、気持のよい温いすべり板をすべりはじめる。徐々にすべる。最後に絶望的に両手を放す。新聞の上へ、彼は仰向けにころがつてしまう。仰向けになつた黄金虫、手足をばたばたさせる。いつもの朝の行事であつた幼い日がついまだそこにあつた。

「おまえが、今日までそのことで苦しまなかつたのは、偶然だ。今まで見のがしてきたのだ。わしの子でないことは、もう確実だ。進子とく

らべてみるがいい。進子はずんぐりとして、わしによく似た小柄な子だ。おまえは長身だ。いよいよもつてがまんがならん。日一日とあいつに似ていくのだ。おまえにこんな苦しみをあたえたのは、お母さんだ。恨むならお母さんを恨め。わしもとんだ災難だ。一生このまま背負いとおせる災難ではない。災難つて奴は、年月が、忘れさせてくれるものだが、おまえは、永の年月を、こわい武器となつて、わしを脅迫する」

一富はあとずさりした。地上で二度と聞けないおそろしい言葉を聞きながら、自分はじつとしていると感じた。騒ぎださないのは、どうしたことか。彼は父の家でこんなひどいめに遭おうとは思わなかつた。一富はからだをゆすつた。彼は現在、成長を身長にだけ見せていた。のびすぎで、中味はひ弱な存在であつた。五尺二寸の母親と同じくらいの背丈になつていた。父親がどこかにあつた文章を口にしているような気がした。この瞬間にも、自分とまつたく縁のないことが喋られているようだと感じていた。その癖、この不吉な、いつたん口に出してしまえば、とりかえしのつかない言葉の意味する現実から身をひきはなすことはできないと観念していた。

「わしは、おまえの父ではないのだ。わしの義務は、いや、権利だ、そいつは、いつおまえに本当のことを告げるかにあつた。その時が、いつか、判つていたんじやない。早すぎたか。しかし、おそいとも思わないよ。おまえは段々似てくるんだ。わしが忘れていることを、いやでも気附かせてしまうんだ。おまえの顔を見ていると、言いたくつてうずうずしてしまうんだ。わしのせいじやない。あいつのせいだ。お母さんのやつたことだ」

子供はあそびごとに真剣である、ゆとりがないのだ、あつという間に信じてしまうという計算の癖を、父は知つていた。

「何故そのこと、今日でなければいけなかつたのですか」

放心していた。一富は父のいうことをよく聞いていなかつた。

「わしの権利だ」

「どういう権利ですか」

「不正とこれ以上、同居していたくないという精神だ。心に思つたことは、口に出した方がいいのだ」

薄弱な動機だと、父を子供つぽいと感じた。今日でなくともよかつたのである。過去にも、いくらもその時があつたような動機ではないか。十五年間の秘密を、父は白日の下にさらした。「暴挙だ」一富はぞうつとした。人間の運命が決定されてしまつたからである。「お母さんは一家の柱だつた。田染家の泉だつた。智慧だつた。魅力だつたではないか」と、母の顔が一富の胸にふくれ上ると、鼻をすすつた。それだけが彼に出来るやつとのことであつた。

「おい」

父が呼んだ。一ト言で、父が何をほのめかそうとしているのか、一富はぴんと感じられた。悪意と邪推と侮辱を、一富はよみとつた。

「おまえは明らかに春日井(かすがい)暁生の子供だ。子供の顔は、生れてから七遍変るといわれているが、おまえはもう大人の顔だ。変らない顔になつた。いよいよ似ているのだ。ごまかしようのないくらいに、あいつに似てきているのだ」

皮膚をつらぬき、肉を裂いて、弾丸のようにとびこんでくる一つの考え、春日井暁生、一富の心の中へ躍りこんだ。新しい観念であつた。

「ぼく、そんなこと知らない……」

「彫刻家だ。いまうり出しの彫刻家だ」

「お母さん、一言もそんなこと言わないです」

「一生お母さんは口を割らないつもりだろう」

彼はふさぎこむというのではなかつた。彼には腑(ふ)に落ちなかつた。新しい苦悩の種がうえつけられて、その花の、成長のほどが判らなかつた。しかし、模糊とした恐怖はあつた。一富は膝をつかんだ。父の顔を正しく眺めた。不安に心が鷲掴(わしづか)みにされていた。父は対等の人間に向つた恰好であつた。すると、一富はひとかどの大人になつた気がした。父が大人なみに話をする。「ぼくのからだから、大人の匂いが発散する」と、陽焼けしているが、ところどころ白くまだらになつている父の顔を見つめた。はたけが出来ていた。自分のもそのような顔になつた気持である。「父は弱気になつている。恐がつているようだ。恐がつていることが、恥しいのだ」と彼は思つた。

「ぼく、どうしてもお父さんの子でないとは信じられません。本家の誰からも、みんなに可愛がられてきた記憶はあるんだけど、誰からも恨まれなかつたです。丹阿弥のおじいさんも、そんなこと一度も言わなかつた。ぼくは恨まれていなかつた。邪魔もの扱いはされなかつたのです」

「みんなが知つてることだ」

「大人は口を合わせて、ぼくをだましていたのですか」

「誰もそれに触れたくなかつただけだ。蔭口には、今だつて十分たのしんでいるだろうが、自分らに迷惑のかかることをおそれているからだ。さけている。くりかえしていうぞ。おまえは断じてわしの子供ではない」

はつきりと父は憎悪をこめて言つた。獰猛に殴りつづけるのである。虚ろで、ひ弱な一富は、一トたまりもなかつた。父は硬化した不恰好な顔になつた。エゴイストをふかく刻みつけると、こんな顔になるものか。一富は凋んだ。そう表現するより他はなかつた。父の前に坐つていると、段々と小さくなつていく。この家に今までなかつた感情が根を下した。この家が或る熱風にまきこまれたようであつた。

「ぼくはどうしたらいいんですか」

間抜けた調子で、一富は言つた。父が立ち上りかけた。こらしめてやるためには、どんなことをしてもかまわなかつたのだといいたげな大人の殺伐な表情。

「そんなこと、わしに判るか」

救いを求めるために、一富は妹のいる部屋をのぞいた。進子は暑さを少しも感じていない、小さい背中を見せて、暑中休暇の宿題ととり組んでいた。茶がかつた髪、陽焼した細い脚。混乱の感情をちよつと彼は中断させただけのことであつた。一富は声をかけそびれた。兄がのぞいているのに、気がつかない。一心な様子が、兄の胸をついた。抑えがたい悲しい気がした。一富は妹が憎くなつた。彼はいつとき、妹の上にあてのない反感をつのらせた。

あれほどのカメラ雑誌が、とたんに興味を呼ばなくなつたのは、不思議であつた。彼は表紙の破れた雑誌を、膝の上でまるめた。手のあげ下しに、刻々自信を失つていつた。どちらを向いていたらよいのか。彼は生涯、二度と人生を直視出来なくなつたような気がした。無理もなかつた。風呂場のあたりで、さかんに水をあびる音がしていた。やけになつて水をあびている。大人にしろ、ただごとではすまされない筈だ。一富は呆然としていた。誰もよんでくれなかつたおそろしい本の中の刺戟的な絵画。一富は十分理解できなかつたが、おそろしさだけは判つた。彼は立ち上つた。この家が急に、大人の世界にはいつたからだ。「妹は父の子だ。ぼくと何の関係があろう」子供であるからと言つて、この家にこれ以上、落着いているわけにいかなかつた。兄妹の勉強室には、大人の感情が流れこんでいた。逃げ出すより他はない。風呂場にいる父にさとられないようにして、一富は靴をはいた。硝子戸をもちあげて開いた。その世界には、息のできる僅かな隙間が残されていた。

二

空気がじめじめとして、一日の最後の暑苦しさをとどめていた。一富は急ぎの用をもつた人のように、上水の土堤に沿つて歩いていた。「自由を失つた。地獄がはじまるのだ」すると、彼の右足が少しひきつるようであつた。十五年間、父は首つりの脚をひつぱつてすごしてきたのである。十五年間、自分は何をしたか。自分がしたと思つていたことのどれだけが、果して自分が実際にしたことになるのか。

「ぼくは、それを疑つてみなかつた。この脚を父がひつぱつていたではないか」コンクリートで出来ている古い橋に来た。彼は胸の高さの手すりによりかかつた。両側から雑草が蔽い茂り、その下を豊富な水が、凄い勢いで流れていた。「自由も地獄もあろうとは、ぼくは考えてみなかつた。生きていくことが許されなくなるということも、思つてみなかつた」ニコンS型、キャノンⅢ型、コニカ、マミヤシックスと、カタログの上でその好き嫌いを比較してみることも、もう許されないと思つた。電気露出計の夢を、今までのように持ちつづけることは出来ないと彼は考えた。彼は踏切にさしかかつた。七本も線路が走つていて、ゆるい傾斜をなしていた。「ここを通るたびに、人間の機能が停止するよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うな錯覚にとらわれる。崖の上に立つと、崖の下へ落ちてみたい誘惑を覚えるあれと同じようだ」踏切は急いでとおらねばならなかつた。はかばかしく歩けない。彼は死を思つた。「死んでいるのと同じことだつた。ぼくは父に死ぬことを希望されていたのだ。はつきりとそのことが判つた。或は、母も――」踏切を渡り切つていないのである。一富は坐りこんでしまいたくなる。母の胸のどこかで、不慮の死をねがつていないとも限らなかつた。否定することはできない。彼はやつと踏切を通りぬけると、追いかけて、遮断機が降りた。近くを発車した電車が、徐々にスピードをまして、地ひびきをさせ、轟然と通過した。一富は歩くことを忘れていた。線路が重さにたえかねて、弓なりにへこんだ。一つの生命がとんだ、瞬間に消える、噛みくだいてしまう。「痛くはなかろう」と彼は舌の先で歯のありかを感じた。「しかも、母ですら……？」この考えに今日まで気附かずに生きてきた驚き。彼は駅頭の騒々しい中を泳ぐように歩いた。もみくちやにされ、彼は流されていつた。どれだけか流されていたが、ふと人の流れからはみ出た。気紛れな流れの作用で、押し流されたのに似ていたが、一軒にはいつた。うちを出たときから、頭にうかんでいたことだ。自分がそうするだろうと、きめていた。何故か、知らない。さてその本がどこにあるか、一富には判らなかつた。美術関係とは判つていた。本屋の書棚を上から下まで、順々に眺めた。人々があふれていた。からだを触れ合わせて見なければならない。どれも白い服、汗くさい。熱心に雑誌や本をひらいている。それをまた熱心に店員が見まもつていた。一富は、美術関係の書籍の棚にゆきついた。「彫刻、彫刻家の顔？」そんな本はなかつた。造型美術とか、彫刻芸術とか、固苦しい本が並んでいた。一つをひき出す。写真を見る。一富の胸は予期することで段々に苦しくなつた。「ぼくはここで何をしようとしているのか。うちを逃げ出した時は、いられなくて逃げ出した気持の方が強かつた。何も、春日井暁生の写真をさがしに来るためではなかつた」と、それでは、おまえは、春日井の子供だと信じているのかと、自分の内部に声があつた。一富は、本から眼を挙げた。喚きたくなつた。頑固に父の言を信じまいとする精神が、彼の頭にあつた。彼は別の本をひき出した。無い。「せめて名前なりと……」見当らないのである。春日井暁生と彼の心が、眼に見えない糸で結ばれているような気がする。書棚にあきらめると、中央の広い棚に並べられた雑誌に、彼の眼は移つた。みづゑ、芸術新潮、美術手帖。ぱらぱらと頁をめくる。彫刻家のアトリエが出てくると、一富は息をとめた。違つている。どこかに春日井暁生の名が出ているのだろうが、急いでいるので、見落しているにちがいないと思つた。

「何故まつ先に本屋へやつて来たのか」

自分がすつかり変つてしまつた。苦しみはじめると、何もかも変つてしまうようだ。父の一ト言が万能の神のように、彼という人間を作りかえた。いま精神をひきむしられ、噛みくだかれているが、そのどちらも自分だという気が強かつた。父が手をひろげた。さあ、どこへなりと好きなところへ行くがよい。放された彼は、よろこぶ手段すら失つていた。父のおかげではじまつたこの解放！　彼は再び通りに出た。

「よう」と、一富は背中を叩かれた。「何をぼやぼやしてるんだ。こころここにないつて顔して、君は歩いているよ」

級友が並んで、のぞきこんだ。「うん、そうなんだ、ぼく」と泣き笑いになつた。呼吸を合わせて応じて来ないので、友達はさようならと、先にいつた。「君とも、さようならだ。ぼくは今日から田染一富じやなくなつたから」いままで生きてこられた習慣を、彼は考えた。

「父が爪でぼくの顔をひつかいたのだ」

彼は駅前から右に折れた。うちから反対の道である。桜並木があつた。上水が桜に囲まれて、いつさんに駈けている。彼はいそぐでもなく、重たげに歩いた。一ト足毎に、土ほこりが舞つた。ズック靴が灰色になつていた。彼はひりひりする頬の傷を撫でた。「同じことを、ぼくは、母にしてやろうとたくらんでいる」すると、一富は泣けそうになつた。舌先で唇をなめたり、唇をかんだりして、上水の流れに気を奪われている風をして歩いた。ひとに顔をよまれたくなかつた。この上水では毎年多くの投身自殺があつた。死体が全部あがつているわけではない。

この下の、コンクリートの凹みに、ただれた死体がひつかかつている。濁つた水の底の方で、ゆつくりと片足が揺れている。死体を発見しているように、一富は眼を注いで歩いた。投身は必ずしも死ぬとは限らなかつた。膝を結んで投身した娘が、こわくなつて、救いを求めたことがあつた。理解できないことを、人間は時折信じなければならないのだろうか。「父の言葉は、まるで想像できなかつた。そのくせ、たちどころにぼくは信じてしまつた」風が吹いているのに、気がついた。まつ向から、土ほこりを捲いて風が顔を打つた。人家が切れた。道は林の中にはいつていた。大きな森だ。道は何かの確証のように、太く、一本だけ森の中に通じていた。自動車や自転車が疾走していた。森の中の道は急がねばならないのか、どの車にもスピードがあつた。どこへいくのか、彼は自分のことを知らなかつた。誰も知らない。無惨な声が聞えていた。空の高いところで鳴つていた。没調子であつた。森が鳴るのか。没調子は森へまよいこんだ彼の運命の情緒と通じていた。

「いまは子供の内。いつかぼくは大人になる。大人にはなりたくないんだ」

みなが待つている或るところへ、一富は一歩一歩近附いているようであつた。或るところとは、どこか。眠りの意味だつたろうか。天国に上るために天の樹をさがして歩いているのか。彼も知らなかつた。トラックがすれすれに通つた。気が狂つたような警笛。運転手が首をのばしてどなつた。世間は一富に無関心であつた。彼がどこへ迷いこもうと、知らないふりをしていた。道をそれた。荒涼とした胸壁に森の深緑と濃い樹液がしみた。彼はしきりと母との距離をはかつていた。彼の記憶が鋭くなつた。

「ぼくは、いま、過去の中に生きはじめたみたいだ。その内に、すつかり過去の中だけに生きることになるだろう。過去が段々と、はつきりした姿をとつて現れてくるからだ。だつて、ぼくはもう現在に生きていないんだ」

右手を顔の近くにもつていつた。五本の爪が丹念に嚙みつぶされていた。汚くて、痩せていて、ひとの手のようであつた。病床で手を顔の上にかざして見ているのに似ていた。彼は一本の巨大な杉の幹につき当つた。かくれんぼのように、その蔭にこつそりとはいると、うずくまつた。「もう誰からも見られない」と思つた。同時に、「誰もぼくに気がついてくれない」幸運と、見すてられたという憐憫が、いりまじつた。行方をくらますつもりはなかつた。根気がつづかなかつたのである。彼は身動きができるようになつた時、膝を起して、坐り直した。彼は再び死にたいと考えた。悪いイメージがいつぱいに浮んできた。彼の世界と大人の世界は、壁で塞がれていた。彼は頭の上を見た。そこ抜けに明るい空と彼との間に、大きな梢がいく層にもなつていた。大きな森にまぎれこんだと気がついた。しよつ中あそびに来ている森であつたのだが。

現在がぼやけ始めていた。「自分はすべりはじめている。みんながぼくのそばから去つていく。知らなかつたこととはいえ、どうして十五年間、おそろしい事実がぼくを怯やかさなかつたのだろうか」

遠くの方で、自動車の疾走が続いていた。物音が次第に遠のいていつた。公園の林の向うに、白い姿がちらほらした。音のない映画であつた。彼は白日のもとの明るい思考の中に、過去がすらすらとはいつてくるのに驚いた。

彼はあたりが晩くなるまで、杉の大木のうしろから離れなかつた。己の無力感に溺れていた。彼は意気沮喪していた。「ぼくは、太陽というものが日一日と新しくのぼるものとばかり思つていた。太陽は毎朝古い日をくりかえしていたのだ」彼が大木の背後から出てきた時、その近くを散歩していた中年の男が、ぎよつとして足をとめた。一富は見つめられているのも感じないで、歩いた。「前に向つて、道はただ一つしかないと思つていた。一つの方向しかないものと思つていたのに、とんでもない道が予定されていたものだ」父は彼が家を出たと知つた時、凱歌をあげたろう。十五年目の最後の仕上げであろう。そして次の目標は？

「お母さん」

眼のくらむほどのヘッドライトをつけて、トラックが森の道を走つていつた。母への敬虔な愛情が、一富をいつそう不安にした。彼は森を抜けた。賑やかな街にはいつた。そこは一富の

住んでいる町ではなかつた。うちから遠くにきているという自覚が、荒涼とした思いをさらに深めた。せまい通りをバスやトラックが通つた。彼は泳ぐように避けて歩いた。神経を緊張させていたわけではなかつた。彼は恐しかつた。自分が春日井暁生の子供であることを、自分が信じてしまいそうであつた。信じてはならない。意気沮喪した彼は、自分の心に向つて、強烈に疑惑を質す気にもなれなかつた。頑是ない子供が食べることをいやがつているようであつた。頑是ない子供と一富の顔に、どれだけの差別があつたろうか。青年になろうとして大人と子供のあいだにあつた彼の顔は、最後の崩れをみせていた。幼さが崩れかけて、一種のとりとめのない、醜い顔になつていた。間の抜けたところがあり、一部分はすでに固まりかけていた。雨になるとぬかるみになる道路は歩き疲れる。せまい通りの両側には、食慾と好奇心をそそる色彩と匂いと形態があふれていたが、興味は呼ばなかつた。音を殺して玄関を出た時から、彼は暑さも感ぜず、食物も眠りも必要でない人間になつてしまつたようである。永遠にかえつて来ない人らしく振舞つた。再び電車の踏切にさしかかつた。越えるのが、やはりこわかつた。自信を失つていた。何かに自分が近附いていた。線路の左右を眺めて、おどおどした。「これが人生だ」と思つた。渡り越えると、街の通りはひろくなり、いつそう賑やかになつた。「ぼくはいま、人生のまん中にいる」

「田染、君、天鼓ケ浦へいくんだろう」

声がかかつて、また級友の一人が肩をつかんだ。

「ぼく……」

「君、申込んだろう。ぼくは、あの時、うちのものと浜名湖へいくことになつてたので、申込まなかつたのさ。ところが、いかなくなつたんだよ。天鼓ケ浦へいくよ。先生に直接頼もうと思うんだ。あそこは、波がほとんどないんだつてね。ヨットにのれるよ」

自分のことだけ喋ると、級友ははなれていつた。級中がいく天鼓ケ浦は、あきらめなければならない。絶望的に悲哀のうちに沈んで、一富はのろのろと歩いた。友達に話しかけたかつた。聞いて貰いたかつた。慰めてもらいたかつた。十五年目の陥没。兇暴な風に似た体験に、彼のこころはあの瞬間から昂奮で震えつづけていた。彼は通りすがりの古本屋にはいつた。柱にかかつている細長い鏡。そこだけ青く、澄んでいた。まんびきを見はる道具であろうか。彼は鏡と向き合つた。いつもの自分の顔があつた。近附いてみると、やはり絶望している自分だつた。燈火が一陣の風で吹きけされた時の暗黒の衝動を感じた。彼は古本屋を出た。書棚には眼を向けず鏡をのぞくためだけにはいつて来た中学生。頭にいろんなことが群つている。頭の中が鳴つていた。今までにない恐怖であつた。すたすたと歩いた。賑やかな通りがやがて切れた。何もかもが、以前よりはずうつと重要に感じられた。光明がほしい。確信がほしかつた。完全な自信がほしい。「この世の中で、大切なのは母ひとりだ」と、彼は改めて不幸を組み直した。観察をした。そして認識しようとつとめた。歩いていることが、ただ足を動かしていることが、彼の思考を乱した。思索の安定感をさまたげていた。思考は力を失つて、一か所ばかり歩きまわつていた。記憶がくもつてしまう。屋敷町にはいつた。生垣をすかすと、そこの家族があかるい部屋で談笑しているのが見えた。或る一軒の邸から、足もとに火がついた風に犬が吠えたてた。小犬らしい。

「お母さんは、父と結婚してから、不貞をはたらいたのだろうか。そしてぼくが生れたのなら、もつと騒いでいた筈だ。ぼくが田染直三の長男として、十五年間、みんなに可愛がられては来られなかつた筈だ。結婚した母は、不貞をはたらいてはいない。それなら、少しも罪はないではないか。女は結婚すると、義務が大きくなる。子供を生むからだ。新しい世代について責任がある。子供を生まなければならない。それに叛いて女が堕落することは、罪である。卑怯だ。結婚は、女を生涯に向つて約束させることではないか。妻の不貞は恥しいことだ。母はそうではない。母は立派だ」

彼は見知らぬ一劃に迷いこんだと気がついた。麻雀屋、のみ屋、小料理屋、わけのわからない家々が集まつて、一種病的な、明るい世界をつくつていた。青柳通りはつとめて避けることと、

学生控室に貼紙が出ていた。一富はもの珍しげに眺めて歩いた。新しく出来た歓楽街であつた。若い女が明るいせまい部屋に、三、四人ずつ坐つていた。門口に出ているのもあつた。彼の眼をじつと見つめる女もいた。どの顔も没交渉な顔々々。一富はのけものにされて歩いていく。この世界の人々は、彼にとつては見知らぬ人々であつた。これからもずうつと見知らぬ人々として過ごしてしまうのである。話しかけられたいと彼は切ない願いを持ちつづけていた。こころの底から、手を出そうとする乞食の羞しい慾望、臆病な願い。決してこの歓楽街の人々を除外したわけではなかつた。歓楽街は間もなく切れた。彼はどこへいくのか。うちの方向とは反対であつた。どことなく当てなくとび出してしまつたのである。二度と戻らない。便りもするまい。何をしているか、誰にも知らさないこと。

「駄目だ、ぼくはかえらなければならない。両親の家にかえつて、寝なければならないのだ」

その場を逃げ出すことは、むつかしいことではなかつた。が、人々から永遠に逃れ去ることはできない相談に思われた。交番の前を通つた。巡査が一応彼に注目した。当てのない彷徨、こころの空しさを姿にさらけ出している。顔中埃をあびている。とがめられても仕方がなかつた。彼はゆきすぎた。口の中がざらざらとした。

三

「直三さんとこの一富さんが、あなたに会いたいと、お勝手口に来てますわ」

本家の細君が良人に言つた。たのしい報告の風である。

「一富が？　おかしな子だ。いつも元気にはいつて来る子ではないか。お勝手口とは、また妙なところに現れたものだね」

「へんですわ。埃まみれになつて、浮浪児じゃないかとびつくりしたくらいです。泣いたらしいのです。眼の下に泪のあとがついています」

一富は本家の廊下を、台所口から歩いた。主人の書斎に案内された。いつもと逆のいき方であつた。彼はまさかの場合のために、用心をしていた。遠いところから抜き足、さし足で、おとし穴へ近寄つていく風である。「もしかしたら、この伯父は赤の他人かも知れないのだ。親密を示しすぎて、とり返しがつかず、恥しいことになつては大変だ」と考えた。降参して、うち負かされた恰好で、一富は椅子にかけた。この家には学問の匂いがしていた。大学教授というだけで、一富には十分であつた。親切をうけたいのをひとに知らせるあの表情で待つていると、

「一富、夕飯はすんだのか」

大学教授がはいつてきた。一富はできるだけ他人他人した顔を装つた。彼は前置もなく本論にはいつた。父の報告は簡単であつたが、森へ迷いこんだこと、杉の巨木に頭をつけて大木の呼吸を感じていたこと、踏切がこわかつたことなどが一度に甦つてきた。それが伯父の表情を見抜き、先をのぞく力をくもらせた。一富はからだがふるえた。

「桑子さんがいる時に、直三がそういうことを話したのかね」

一富は意外であつた。伯父はすでに知つていた。十五年昔に知つている落着きであつた。伯父は苦笑した。その眼をじつと甥に置いた。いまだ花は咲かず、茎ばかりでのびている植物のような甥。本当の子供ではないと宣告された子供の心理状態を観察しようと、伯父は言葉をひかえた。そのやり方には、これ以上の責任を背負いこまされてはという用心も附随していた。

「直三は、わがままだ」

期待どおりになりそうであつた。一富は鼻腔を大きくした。

「少し月が足りなかつた。それだけのことだ。よくあることだ。一富は九月生れだつたね」

「九月十三日です」

「直三が結婚したのが、その年のはじめだつた。たしか一月の中旬だつた。月をかぞえると少し足りない。つまり一富は、月足らずで生まれたのだ。問題はそれだけだ。直三はとるに足りない理由で、一富をいじめたのだ。破廉恥な、親にもあるまじき軽率な振舞いだ」

期待が裏切られたように一富は聞いた。一富はすうつと胸がすいていくのを覚えた。気持はつかみ得た。すると、のぞんでいたことが起らず、期待が外され、燃え立つていた昂奮が俄かにさめていくのを感じた。一富は何か不満になつた。「それなら、悲劇が真実であつた方がよ

いのか」断乎として否である。あの悲しみは誰よりも判つたつもりである。「根も葉もない、薄弱な疑惑だつたのか」

「お父さんが十五年も、それをひたかくしにかくしてきたということが、納得できないのです」

「あれは、神経質だ。怯えやすい性質だ。自分で描いた幽霊だろう」と、経済の専門家はこともなげに断定を下した。

「伯父さんたちも、昔からそれを知つていたのですか」

「うむ、直三があまり騒ぐのでね」

「ぼくには、お父さんが根も葉もないことで、言いがかりをつけたとは思えないのです。お父さんには確信があります。それは判ります。ぼくの手では、どうにもならないのです。ぼく、うちへかえるのがこわい」

「一富は、あの家へかえるより他にはない。どこへも行けないではないか。丹阿弥のおじいさんは、悲しむだろう。そういうことを知つて、腹をきめることが、肝腎だ」

「ぼくのお父さん、馬鹿ではないです」

「しかし、小心すぎる。自分の描いた影に怯えている。商人らしくない臆病ものだ」

「ぼくがどんなに傷をうけるか、お父さんはちやんと計算してやつたことです」と、一富は抗弁のように言つた。自分のうちに或る種の慾情のようなものが湧き上るのを感じて、彼はびつくりした。彼は伯父をあまいと思つた。不自然なくらいにあまいのである。「伯父は裁判官になることを、忌避している」と、一富は見た。同族間の、あの暗合すら流れ出さないではないか。

「妙だね、一富は、まるでお父さんの子でないことを願つているみたいに聞える」

声をたてて伯父は笑つた。伯父はうつかり手を触れて、汚れるまいと、解剖にのぞむ医師が両手をあげているように手をあげていた。「抽象的に、この伯父も、どうやらぼくが田染家の人間でないことを感じているらしい。正気でのぞみはしていないのだが、事実を遠くから正確に感じているらしい。どうして声に出して笑えるのか」と、一富は見抜いた気がした。が、伯父は、低劣な、破廉恥な、にくむべき言いがかりに対してすら、好奇心をつのらせる魅力を感じているらしかつた。

「ぼくは二度と鳴らない何かの楽器になつたみたいな気がします」

父の一ト言が、突然、なだれ落ちたからだ。彼の世界はきゆうんと一瞬妙な鳴り方をして、奇妙にうつろになつた。調べを失つた。楽器に戻ることを、一富はどわすれしていた。

「生れてきて、ぼくはみんなにすまないと思います。伯父さんは春日井暁生という人を知つてますか」

「会つたこともない。その人の写真を見たこともない。注意してないせいか。一富がそんな人間に興味をもつことは、いけないよ。それこそ自分から、田染一族からはみ出してしまうことになる。直三が何といおうと、忘れてしまうのだ。一富は学校の成績もよいと聞いている。そんなことで、勉強に故障が生じては、それこそ、お母さんが可哀そうだろう」と、伯父はこの問題が本能的な人間にあたえる打撃についてのひそかな興味をもつていた。奥歯にものがはさまつた言い方になるのは、無理ではなかつた。そのため、生れてはじめて、冷酷むざんな社会の一員となつた一富の自覚に触れることが出来なかつた。

「伯父さんにお父さんを叱つてもらうことを考えてきたんだけど、そんなことしたつて、どうにもならないことがよく判りました」

一富は伯父が信用できなかつた。月並な説教には、がまんがならない。が、心が動いたようなふりをした。彼はみんなを疑いはじめた。疑うことを、漸く知つた。

「一富さん」と、伯母が顔を出した。「電話をしたら、お母さん、とつても心配してましたよ。早くおうちへおかえりなさい。ごはんも食べないで、いままでどこを歩いていたのですか。五時間も前に、だまつておうちを出たということだけど」

「ぼく、かえります」

「なにね、直三が突然この子に、自分の子供でないと宣言したのだ」こともなげに伯父が言つた。若しかしたら、そのことで生命をなくすかも知れない重大なことを、伯父は世間話の調子

で口にした。
「とんでもないことですわ。直三さん、気でも狂つたのですかね」言葉ほどにはびつくりしていない。
「父の方が、もつと確かだ。あなた方のように、その場かぎりの調子では言わない」と、一富は椅子を立ち上つた。
「例の虫が、また起つたのですかね」
「わがままだ。軽率の一言につきる。困つた弟だ」
「根はちつとも悪い方ではありませんがね」
「生半可なエゴイストだ」
一富は背後の会話をききもらさなかつた。頭の中で手足をふりまわして、天邪鬼になりたい欲求が起つた。彼はズックの靴をはいた。それはすでに靴の形をのこしていなかつた。濡れて、叩きつけられた一片の紙屑のようであつた。
「さようなら」
先生にお辞儀する時のように頭を下げると、一富は外に出た。
「どこまで祟るんですかね、桑子さんも気の毒ですよ。それにしても直三さんも、いい加減忘れてしまえばよかりそうなものですわ」
「女のひとは、うつかり恋愛も出来ないという見せしめになる」
「結婚前の恋愛が、こういつまでも祟つては、死ぬまで安心が出来ません。あの子、帽子もかむつてなかつたんですね。庭へ出るにもいちいち学帽をかむるという癖の子が。よつぽど応えたとみえますね」
「なに、すぐに忘れてしまうものさ。十五歳だろう。直三が取消せば、済む」
その時分、一富は何かを破壊したい衝動に憑かれて邸町を歩いていた。「ぼくは要するに不安のかたまりだ」と、実も花もない思いがしたが、得意でもあつた。彼は人間のこころに巣喰つているもうひとりの自分というものを発見した。単純でなくなつた。解決のつかない精神の世界の中に、飽くことを知らない意識が待ち伏せをしていた。
「お父さん、あのこと、お母さんに喋つたかしら。お母さんは知らないで、漠然とぼくを心配してるのではないか」
呟いて、一富は立ちどまつた。更生車が車体をがたがた鳴らして通りすぎた。彼の頭は朦朧となつた。ちよつとの間ができた。「お母さんとそのことを話すのは、つらいな」新しい観念に押えつけられている現在、このことは重大に感じられた。「しかし、お母さんだけが真実を知つているのだ。ぼくはぼくの口から訊くべきではない。感じるだけで、十分だ。もつともお母さんの愛情は、少しも変つていないのだ」と思い、「それは、判る」もう一つの自分が、言下に肯定をした。彼は胸の中が軽くなつた。十五歳を思つた。あんまり若すぎる。性別もまだ生じていない。「だからお母さんにとつては、ぼくがあつてもなくとも同じことだ。ぼくは風みたいに軽い存在。お母さんがひとりでいるときみたいに苦にならない重量だ」と、僅かな光明であつた。

四

枠が粗末で薄手につくられているので、この戸を開ける時は、いかにも硝子の全部をもちあげるような手応えがあつた。喪失状態の一富は、われにかえつた。三和土に立つていた。うちの中からはかわつた物音も聞えなかつた。が、勝手のちがつたところに彼は佇んでいる気だつた。彼をとりまいた空気には、固定した苦痛があつた。数時間よりも永い何秒かがすぎた。母の気配が近附いてきた。歩きながら廊下のスイッチを入れる。あかりに浮き出されてみると、一富の頭がいかにも痴呆のように麻痺しているのが判つた。
「おかえり」母は微笑で迎えた。その顔には無造作に、どんな言葉も口に出せる大胆さがあつた。「どうして上らないの。まるでよそのお家へいつたみたいよ」
のろのろとズック靴を脱ぎながら、「よく考えてから行動しなければならない」ということは判つていた。母のうしろからついて歩いた。案内人のうしろをついていく。この家の感情には、とたんに素人になつていた。手をとられなければ、歩調が保てなかつた。「父はいるのか。気まりが悪いので、父は静かにしているのではないか。人間の皮をかむつている以上、あのことに無神経ではいられない」と、茶の間にちや

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com